

# Newsletter

## CONTENTS

- 所長あいさつ ..... Pg.1
- 第15回女性文化研究賞・研究奨励賞贈呈式ならびに記念講演 ..... Pg.2
- 新企画 所員紹介(第1回) ..... Pg.3
- 第15回女性文化研究奨励賞受賞記念 第177回公開研究会 ..... Pg.4

No.80  
Summer, 2023



## 所長あいさつ

武川 恵子

Newsletterは、この号から原則PDF版のみでの発行となりました。これを機に、当研究所の研究活動についてのみならず、個々のメンバーの研究についても、より充実した情報発信に努めてまいりますので、お送りするメールから、あるいは当研究所のHPにアクセスいただき、引き続きお読みくださいますよう、お願いいたします。

また、今年第15回目となった昭和女子大学女性文化研究賞・奨励賞(坂東眞理子基金)では、本学関係者を対象とする奨励賞が当研究所の遠藤由紀子研究員に贈られました。当研究所ではこれを記念した研究会を公開で開催いたしま

したが、今後は、これまで研究所内で相互研鑽のために行われてきた研究会を原則公開で行うこととし、発信に努めてまいります。

さて、今年6月に発表されたジェンダーギャップ指数は146か国中125位と過去最低となりましたが、その要因の殆どは政治分野の遅れにあります。しかし、希望の光も見えます。昨年は衆議院で、今年は参議院で、列国議会同盟の作成したツールキットを活用した自己評価が実施されました。これによると、衆議院議員を対象にしたアンケート(全465名対象、有効回答率82.2%)の間5「一定数の女性の議員を確保するための仕組み(制度)は必要だと思いますか」に対し、「必要24.1%」+「どちらかといえば必要25.5%」は「必要ない8.1%」+「どちらかといえば必要ない11.0%」を大きく上回り、クオータ等への理解が広まっています。この自己評価に尽力された「政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟(会長:中川正春議員)」に敬意を表するとともに、近い将来、具体的に制度が実現することを心から期待しています。

(ビジネスデザイン学科特命教授・元内閣府男女共同参画局長)

昭和女子大学女性文化研究所『女性文化研究叢書 第13集』刊行記念シンポジウム

## コロナ禍で何が変わり、何が明らかになったのか ～研究成果とこれからの社会に向けた現場・研究者からのメッセージ～

2023年10月7日(土) 10:00～12:00 @Zoom

本シンポジウムでは、『昭和女子大学女性文化研究叢書第13集 コロナ禍の労働・生活とジェンダー』の研究成果をもとに、今後の新しい社会に向け、女性の視点も踏まえて、研究者・行政関係者・実践者・生活者など様々な立場から討議し、提言を行います。女性文化研究所シンポジウム参加googleフォームからお申し込みください。

※10月4日(水) 正午申込〆切 <https://forms.gle/1hP4VBV28LwC42Tu5>



## 第16回 昭和女子大学女性文化研究賞・女性文化研究奨励賞(坂東眞理子基金)〈募集予告〉

男女共同参画社会形成の推進と女性文化研究の発展に寄与する研究を対象とし、男女を問わず趣旨にあった著作(単行本)に対し、授与するものです。

応募対象: 2023年1月1日から12月31日までに出版され、日本語で著された単行本。

応募受付: 2023年12月1日から2024年1月31日 ◎要項・申込書はHPにて11月配布予定

第15回昭和女子大学女性文化研究賞・同奨励賞(坂東眞理子基金)贈呈 2023.6.1(木)

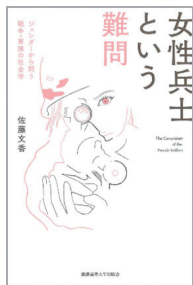


坂東眞理子総長

昭和女子大学女性文化研究賞と同奨励賞は、坂東眞理子本学総長寄贈の「坂東眞理子基金」を基に、男女共同参画社会形成と女性文化研究の発展に寄与する研究を対象として2008年に創設された。第15回研究賞は、一橋大学大学院社会学研究科教授・佐藤文香氏の『女性兵士という難問：ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』（2022.7 慶應義塾大学出版会）に、卒業生を含む本学関係者に贈られる奨励賞は、遠藤由紀子・本学非常勤講師（本研究員）の『会津藩家老・山川家の近代：大山捨松とその姉妹たち』（2022.5 雄山閣）に贈られた。研究賞は学内選考委員10名と学外選考委員の岡田恵子内閣府男女共同参画局長、辻村みよ子東北大学名誉教授によって、奨励賞は学内選考委員9名によって選考された。

冒頭、坂東総長・選考委員長が「校歌にも謳われる『女性文化の帆を張る』という建学理念に出版・活字文化が貢献することを信じ、本を書く人を応援したいとの思いで顕彰事業を始めて15年。この間の関係者のご協力に感謝すると共に、折しもロシアのウクライナ侵攻等の中、女性兵士という正に難問について長年研究されてきた成果を出版された佐藤文香様と会津愛に溢れた研究書を出された遠藤由紀子様の受賞者お二人をお祝いする」旨挨拶した。

続いて、研究賞の選考結果が志摩園子選考委員より（概略以下のとおり）報告された後、贈呈書と副賞が坂東総長から佐藤氏に手交された。



対象は13点、2月、3月の学内選考委員会です。単著2点が選出され、4月14日学外選考委員の出席の下、受賞作が決定された。

佐藤文香氏は、2002年に第6回女性学研究国際奨励賞を受賞された頃から、戦争・軍隊を批判的に解剖するという研究に「ジェンダーから問う」という視座を貫いてこられ、今回の受賞作は、2004年に著された『軍事組織とジェンダー：自衛隊の女性たち』から17年を経た待望の続編としてジェンダーの視点から戦争・軍隊の社会学という難問を問い直した。

世界的にみて、フェミニズム界を分断し、その限界を論じてきたことが、難問であったことは言うまでもない。前著から17年の間、批判を受けながら、どこが難問であるかを示すことに、躊躇しつつもおひとり取り組み、発信を続けてきた姿勢と奮闘も含めて、また、日本社会に突き付けられた問題として、応援しなければならぬという結論に至ったのが、今回の受賞の決定となった所以である。



次に、奨励賞の概略以下の選考結果が福田委千代選考委員より報告された後、贈呈書と副賞が坂東総長から遠藤氏に手交された。

対象は1点、2月、3月の学内選考委員会において審議、決定した。

本書は序章：山川家の母と兄弟姉妹の通覧、第一章：長女、第二章：次女、第三章：三女・四女、第四章：五女を取り上げてそれぞれの生き方を明らかにし、第五章：山川家に嫁してきた女性たちの人生、終章：次男・山川健次郎の言葉を引いて山川家の子女が各々「眼界を広く持て」たと

を評価している。受賞理由は、(1) 先行研究の他、私家版等の珍しい資料や関係者への取材から、山川家の姉妹たちと山川家に嫁いだ女性たちの幕末から明治にかけての足跡を辿りつつ、各々が新時代の教育、人材育成、社会福祉活動に貢献したことを評伝風に提示し評価した点、(2) 山川家の姉妹たちのそれぞれの人生を追う中から、男兄弟や姻戚までも含めて、壮大な親族ネットワークが形成され維持されてゆく様子が了解される点、(3) 一般にも理解しやすい叙述で一貫されている点である。大文字の歴史では知りようのない多様な女性の生活が浮き彫りとなり、読む者が共感・実感を伴って理解できる点は大きい。



佐藤文香氏

続いて佐藤文香氏による記念講演が行われた。要旨は以下のとおりである。

2004年の初作を書いた時の「悪しきタリバン政権の打倒のために爆弾の雨を降らす男女平等な米軍の女性パイロットを『彼女は英雄だ』と称揚するのでもなく『男になった女』として切り捨てるのでもない道を探りたい」という思いは今回受賞の2冊目も同じ。

歴史的に「保護する男性/される女性」という図式は、戦争の大義を生み出し、男性に奮起を促してきた。だが、ウクライナで戦う女性の姿が、男性に対しプレッシャーを与えたりシンパシーを掻き立てたりする役割を担ったように、今世紀の戦争とジェンダーの関係は、これまでのジェンダー化された関係を再編しつつ複雑化している。本書では、「女性兵士の是非」といった議論をカッコに置いて、「女性兵士という難問」を複雑なままに記述することに徹した。そう思うようになったのは自衛官の女性達との出会いの結果だ。シンシア・エンローは、社会が軍事化というプロセスを辿っていくには、女性の分断が不可欠であり、分断や敵対が、ジェンダー化された軍事化の全貌を検証されないままにしてしまうと主張している。軍隊が女性兵士に何を与え、何を得ていくのか、その仕組みを正確に見つめるべきと思った。今作では英語圏での「批判的軍事研究」の蓄積に連なることを志向した。少数派の女性兵士が「敵」よりもむしろ仲間の男性同僚による攻撃に日常的にさらされるという環境下では、アブグレイブ刑務所で拷問に参加した女性兵士もまた、図と地が反転する「ルビンの壺」のような複雑さを端的に示す存在として考察しうる。

私たちが問うべきは、「取りこまれ」批判を超えて、戦争・軍隊がどのような男性/女性によって担われ、どのような男性/女性に、どのような加害/被害関係を生起させているのかをしっかりと見ること。そして、「男らしさ/女らしさ」をめぐる考えがどのように操作されることで、軍隊が支えられ、戦争が推進されてきたのかを考えることであろう。

(文責：武川恵子選考委員)



受賞者と選考委員



## 女性文化研究所 所員紹介 〈第1回〉

## 「女性文化研究所の所員紹介にあたって」

坂東 眞理子

昭和女子大学女性文化研究所は1986年5月、創立65周年を記念して設立されました。88年4月の大学院博士後期課程（生活機構学専攻）開設に際してはその基盤として主導的な役割を果たしました。初代の研究所長は人見楠郎理事長・学長（当時）、白石浩一副所長でした。私は5代目伊藤セツ所長のあとを継いで2004年4月第6代所長に就任しました。正門の横の5号館の4階でしたが約1年で5号館をプリティッシュスクール・イン・東京（BST）に賃貸するためそこを引き払い、現在の学園本部館地下1階のスペースに引越しました。

女性文化研究所長としての最初の仕事は研究所20周年記念女性文化研究叢書第5集『輝く女性たち＝光葉の35名』（御茶の水書房）の編集・刊行でした。2003年に卒業生のうち仕事を持って働いている人に調査票を送り、その中から回答を頂いた35名の方に所員と光葉同窓会役員が手分けしてインタビューし、その記録をまとめました。私も歌人の馬場あき子先生を担当しましたが得難い経験であるとともに、昭和女子大学の歴史や教育を知る貴重な経験となりました。

毎年刊行していた研究所紀要には32号に「アメリカの戦後統治と日本の女性政策」、33号に「戦後から国際婦人年までの女性政策」、34号は「女性エクゼクティブのキャリア形成と人間関係の与えた影響」（いずれも研究ノート）を掲載していただきました。そのほか紀要には32、33、34号に3年間にわたって読売新聞と昭和女子大学が共催した「読売・昭和女子大 女性アカデミア21」の討論の概要を紙面よりやや詳しく紀要に掲載しました。また私が会員だったリーダーシップ111の方たちに昭和女子大学女性学公開講座で「キャリアビジョンをまず描こう」の講演後、学生とグループディスカッションをしていただきました。これが現在のメンター制度の基礎の一つになっています。

私にとって一番ありがたく、また女性文化研究所にとってよかったと思うのは2006年に刊行した『女性の品格』（PHP新書）の印税をもとに昭和女子大学に坂東眞理子基金を設置し、毎年女性文化研究賞と女性文化研究奨励賞を差し上げることができるようになったことです。1次審査、2次審査、そして最終審査まで所員が手分けして読んで議論し、受賞作を決定していただいています。5月初めの創立記念式典での発表、5月末前後の授賞式、記念講演などの活動を15年間にわたって続けることができました。これはひとえに当時副所長として研究所の活動を支えていただいた掛川典子教授、キャリア支援部長の森ますみ教授、副学長の志摩園子教授はじめ所員の皆様の理解とご尽力のおかげと深く感謝しています。

（総長・女性文化研究賞選考委員長）

## 「研究・教育と私」

志摩 園子

2009年4月からの女性文化研究所での所員の活動を振り返ると、第一に、2014年に始めた国際シンポジウム“Women can Change the World”があります。日・ジャマイカ外交関係樹立50周年記念として外務省の協力のもとに開催したものでした。第5回目の2021年には、中島記念国際交流財団助成事業のお陰で、東京国際交流館国際シンポジウムとして開催することができました。この活動は、現在、所長を担っている国際文化研究所で、ジェンダー・イシューを議論するグローバル・セミナー（女性大使の講演会：女性文化研究所と共催）に繋げることができました。

振り返っての第二は、本学100周年記念の女性文化研究叢書第12集『女性リーダー育成への挑戦』があります。女子大学の伝統を今も繋いでいる英国オックスフォード大学ニューナム・カレッジ他でのヒアリング成果も含めて「21世紀の女性の高等教育とリーダーシップの醸成」を4名のプロジェクトメンバーで執筆することができたことです。国内外の激減する女子大学の存在意義について議論したことを基盤にして、所員2名で女性の生涯に亘る『教育・訓練』の継続的な学習の仕組みの研究へと発展させました。

自分の研究を振り返ると、その発端は、学部卒論で考察したラトヴィアという小国の成立についてでした。特に、大国ロシアとドイツの狭間にあるバルト海東南岸地域に第一次世界大戦後に成立した小国の意味を国際関係の文脈で研究してきました。研究当初は、冷戦期で、現地へ赴くことは困難なことから、当時、世界のバルト研究の中心であったドイツへの留学の実現によって、研究の道を切り開くことができました。ベルリンの壁崩壊前の1988年の夏、留学先の西ドイツからラトヴィアへ初めて飛んだチャーターフライトに乗ることができ、軍用機と並んで着陸した時の涙と拍手の50名余の乗客の思いを忘れることはありません。

翌年からは、毎夏現地を訪れ、文献を探し、史料を黙々と読み、研究者との議論に向き合う研究を続けました。現地研修に学生を伴ったことは、学生の学びの視野を広げるだけでなく、自身の研究の見直しにもなり、研究は、教育と表裏一体であることと痛感しました。今年のラトヴィア共和国からの勲章「クロス・オブ・オーダー」の授与は、激励のメッセージであり、今後も研究に真摯に取り組みたいです。



2023年2月  
ラトヴィア大統領の執務室にて

（生活機構研究科特任教授・女性文化研究所運営委員・国際文化研究所長）

## 研究報告 Workshop Report

第15回女性文化研究奨励賞（坂東眞理子基金）受賞記念

第177回女性文化研究所研究会 ハイブリッド開催

2023年7月29日（土）10:00～11:40

『『会津藩家老・山川家の近代—大山捨松とその  
姉妹たち—』から学ぶこと—今に生きる私たち  
へのメッセージ—』

報告者 遠藤由紀子氏

開会挨拶 坂東眞理子 総長・女性文化研究賞選考委員長

コメント 松田 忍 歴史文化学科教授

第177回の研究会は、第15回女性文化研究奨励賞（坂東眞理子基金）受賞記念として一般公開で開催された。受賞作は幕末の会津藩家老・山川家の7人の兄弟姉妹が、戊辰戦争の敗北を経てどのような明治期以降を生きていったのかを文献史料、フィールドサーベイ、オーラルヒストリーなどの調査により明らかにした一冊である。7人の内、4人が海外遊学・海外留学の経験を持つ。研究会では女子教育・社会福祉に尽力した山川家の姉妹の足跡について報告した。

山川二葉（長女）は、1877年より東京女子師範学校の舎監（兼教諭）を28年勤め、教え子は女学校の創立者となった人物が多い。また、1886年には共立女子職業学校設立発起人の一人となり、女子の自活の道が立つことを目的とした学校を支援した。

山川操（三女）は、1880年に駐露公使として赴任する柳原前光夫人・初子の世話役としてロシアに2年滞在した。帰国後の1884年より宮内省御用掛（フランス語の通訳）となり、29年勤めた。多くの書生を抱え、教育家として明治期の雑誌で紹介される。日本赤十字社篤志看護婦人会等にも貢献した。

大山捨松（五女）は、1871年に岩倉使節団に伴い渡米（11歳）、11年間のアメリカ留学を経験する。1882年にヴァッサー大学を卒業、帰国後は先妻を亡くしたばかりの大山巖（陸軍大将）と結婚、鹿鳴館の貴婦人と称される。日本初となった慈善バザーを津田梅子や三姉の操と発起、全国の女子の模範となった。1900年、女子英学塾（現、津田塾大学）が創立、創立願の筆頭は捨松であり、寄附集めに奔走した。初代同窓会長でもあり、「梅子と共に」創立と運営と教育に尽力した。

姉妹と共に歩んだ山川健次郎（次男）は、イエール大学で学び、日本初の物理学博士を授与され、東大総長・京大総長・九大総長を歴任している。健次郎の妻柳や長男洵（水産学者）の妻良（陸軍軍医の梶井家より）、三女照子（東京都知事・東龍太郎の妻）などの回顧録から家庭での健次郎像も明らかとなった。健次

郎は、礼儀や時間に厳しい評がある一方で、九大での演説で、当時の学者は専門外の知識がないのを象牙の塔に籠もると自慢する人が多いことから、学生には「眼界を広くもって専門外の知識を得ること」を勧めている。

兄弟姉妹の母・艶は「ならぬことはならぬ」という「什の掟」に形容される揺るぎない志操を持っていたが、志操上に関する事以外には寛容であった。その寛大な精神は、藩政時代からの質実剛健、良妻賢母主義教育といった会津藩の士風をしっかりと守りながら、4人の子女たち（長男山川浩も幕末に欧州を外遊した）が海外生活を経験したことで、異文化・習慣を学び、相互理解に努め、戊辰戦争の敗北に負けず、新しい道を切り拓いていく原動力となり、山川家の兄弟姉妹の挑戦となり、生き方として顕れたことの根源となった。

二葉は、賢母は家庭でも知識欲を持つべきということを持論とし、女性が自立できる技術習得の教育を支援した。捨松は、良妻賢母となる教育は「家庭教育」で行い、「学校教育」では幅広い知識を学ぶべきという持論を持っていた。彼らの生き方から「揺るぎない志操を持って」、尚且つ「眼界を広く持つ」ということが受け取れると推察でき、リベラルアーツやグローバル教育を推進する現代に通じる生き方といえる。

公開研究会では、恩師や調査に協力して頂いた山川家のご子孫、会津藩ゆかりの方にもご参加を頂いた。最高齢は99歳の方（次女ミワの曾孫にあたる）であり、一族の功績を若い学生を含め共に振り返る時間を持てたことを大変喜んで頂けた。貴重な機会を与えて下さり、深く感謝を申し上げます。

（記：遠藤由紀子 歴史文化学科非常勤講師・女性文化研究所研究員）



1896年6月 山川家の兄弟姉妹と家族（『山川浩』桜井懋、1967年、私家版）

司会は青木所員、質疑応答のコーディネーターは本多ハワード所員、閉会挨拶を北本副所長が務めた。福田所員、学生からの質疑もあり、一般の方やWEB参加者を含め、約90名の参加となり、盛会であった。

